Why not Mac?

vol.9

Mac導入のサブスク化

“ Apple Financial Servicesの導入促進に期待 ”

買い切りやリースから、これからはハードもサブスクリプションの時代

Macの企業導入の際に必ず決めなければならない検討項目がある。それは購入方法である。企業の予算管理や設備投資の状況によって、Macの購入方法も変わってくる。ビジネスの業績がよく、節税の一貫でIT機器に設備投資を行うケースや、積極的に人材を確保する目的から、新しいモデルを積極的に購入するケース、一定のライフサイクル期間でリースで導入しているなど、様々である。導入するモデルの価格によって、会計処理は異なってくるが、10万円以上のMacであれば、一般的には固定資産として計上した場合に、PCの法定耐用年数で減価償却していく必要がある。通常利用なら4年、サーバ等で使うなら5年となる。これは、購入した場合でも、ファイナンスリースを契約した場合でも同様である。

こうした背景から、企業導入されるMacは4年程度使用されることを前提としている。4年という期間について、皆どう思うだろうか？長いと思うか？短いと思うか？

企業のビジネスモデルによるが、コンシューマ市場にはどんどん新しいサービスが浸透し、ユーザ体験の向上は日々起きている。アプリを介して、クラウドサービスを日常的に使うことに慣れ、手元のデバイスでは常に新しい機能を享受できるようになっている。クラウドサービスのサブスクリプションモデルは、毎月定額の料金を支払うことで、必要な期間、必要な分だけ、利用権に対して料金を支払う仕組みである。音楽や映画、TV番組などのコンテンツもサブスクリプションモデルが当たり前になった。

企業内でもソフトウェアを中心にサブスクリプションモデルに切り替わっている。クリエイティブソフトの定番のAdobeから、社内のファイルサーバからオンラインストレージに移行が進んでいるBoxやDropbox、Appleデバイス管理のソフトウェアを提供しているJamfもサブスクリプションモデルだ。これらのソフトウェアは契約期間の間、常にソフトウェアは最新のバージョンが保たれ、新しい機能のアップデートを受けることができることがメリットだ。最新の機能をすぐに利用することができ、より生産的かつ創造的にビジネス課題に向き合うことが可能になる。

ソフトウェアを中心としたサブスクリプションモデルが浸透する一方で、それらを利用するデバイスはどうだろうか？インターネットブラウザから各種サービスにアクセスできるクラウドサービスとはいえ、Macの購入方法から何年も前に購入したデバイスが使われていることが多い。Appleからは毎年最新のOSがリリースされ、古いモデルもサポートされてはいるが、OS機能を遺憾なく発揮して利用するにはハードウェアも新しい方が望ましい。

また、企業の成長段階によっては、社員の流動性の高さもあり、一つのMacの利用期間が1～2年というケースもある。この場合には、Macを再キッティングして、別の利用者に割り当てるような再利用もある。ただ、新しく入社した会社から支給されたMacが中古だったという点で、従業員体験が下がってしまうこともあり、企業によっては利用済みのMacは在庫にしているところもある。この在庫は中古業者等に転売するようなところもあるが、セキュリティの観点で不安がない訳でもない。

企業のデジタル化が進み、様々なサービスがサブスクリプションモデルで導入できるようになっている一方で、ハードウェアの調達にはまだまだ課題が多く、デジタル化には程遠いのではないだろうか？

IBMがMacを導入することでTCO（Total Cost of Ownership/総保有コスト）を削減できた、という事例があるが、この中で語られているコスト削減の一つとして、Apple製品の市場における残存価値の高さが挙げられる。Apple製品は企業のIT機器のライフサイクル管理においても高い付加価値がある。

最後に、企業活動において大事な視点は「環境」ではないだろうか？Apple製品は100%再生可能エネルギーで製造され、再利用可能な素材で作られているモデルもある。これからはSDGsへの取り組みも含めて、エコな企業が選ばれていくと思う。エコであることが、企業がIT機器を選択する上で重要な基準の一つになるだろう。その時、Macが再利用可能な素材で作られていること、Appleが100%再生可能エネルギーで製造していることが、Macのサブスクリプションモデルを実現する大事な要素となる。

USのAppleのWEBサイトを見てみると、Apple Financial Servicesというものがある。そこには、「最小限の先行投資で、必要なApple製品とビジネスアップグレードを入手できる」とある。こうしたサービスが日本市場においても導入が促進されることで、Macのサブスクリプションモデルが実現できる日も近い。